

飯倉 C 遺跡 3

第5次調査



2001

福岡市教育委員会

序

福岡市西部に広がる早良平野には、多くの弥生時代遺跡がありますが、飯倉遺跡群は青銅製の武器や鏡の鉄型などが出土する弥生後期の重要遺跡であります。今回報告する飯倉C遺跡第5次調査も弥生時代後期の集落遺跡で、100m²あまりの調査区から住居跡や溝から多くの遺物が出土し、新たな資料を提供いたしました。

報告書の刊行にあたりまして、発掘調査に多人なご協力とご理解を賜りました株式会社東南不動産に心から感謝申し上げますとともに、本書が研究資料として活用され、さらには埋蔵文化財保護の理解の一助になれば幸いです。

平成13年12月27日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例　　言

- 1 本書は民間開発に伴って1999年に実施した、福岡市早良区七隈二丁目835-35・979-1に所在する飯倉C遺跡第5次調査の調査報告書である。
- 2 本書に掲載した遺構の実測は米倉秀紀、津曲大祐、官原邦江が行った。
- 3 本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影、遺物の実測、製図は米倉が行った。
- 4 本書の編集・執筆は米倉が行った。
- 5 本書に掲載した遺物・記録類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

本文目次

1	遺跡の立地と既往の調査	1
2	調査に至る経緯と調査の経過	3
(1)	調査に至る経緯と調査組織	3
(2)	調査の経緯と概要	3
3	調査の記録	3
(1)	遺構・遺物の概要	3
(2)	堅穴住居	3
(3)	溝	7
(4)	上坑	9
(5)	ピット	13
4	まとめ	14

図版目次

図版 1	調査区全景	15
図版 2	堅穴住居・SD01	16
図版 3	SD01・SK12	17
図版 4	SK04・14・15・17	18
図版 5	SK14・15・17・19ピット	19
図版 6	出土遺物 1	20
図版 7	出土遺物 2	21

調査番号	遺跡略号	調査地地番	申請面積	調査面積	調査期間	申請者
9 9 7 6	IKR-C	城南区七隈2丁目831-35, 979-1	945m ²	390m ²	000322 / 000414	株式会社 東南不動産

1 遺跡の立地と既往の調査

飯倉遺跡群は、福岡市中西部に広がる早良平野の東部にあり、早良平野の奥部にある油山山系から平野の北端までうねうねと伸びてくる細長い台地上に立地する。飯倉C遺跡はその台地の北部にある。調査地点は谷の入り口が激しい台地の東向き緩斜面上に立地する。調査地点の北側には深い谷があり、その標高差は5mに達する。調査地点の周辺は住宅建築による削平が激しく西隣の住宅や南側道路と調査区の比高差は1~2mに及ぶ。

飯倉遺跡群全体ではこれまで10次を超える調査が行われているが、遺跡全面積から見ればまだごく一部の調査である。遺跡群は全般的に削平が著しく、台地中央の高い部分での残りは良くない。弥生時代・古墳時代の堅穴住居址は各調査で散見できるが、多くは台地の落ち際に台地の稜線と併行に並ぶように作られている。弥生時代住居は残りが良いものが多い。それでも出土土器量は比較的多く、D遺跡では鏡鉄型や鐵器類が出土している。弥生時代の墓はC遺跡2次調査(飯倉唐木遺跡)、D遺跡、F遺跡などで確認できるが、1963年に崩落した墳丘から銅劍が出土した唐木遺跡では、2次調査で前期後半以降の甕棺墓51基、土壙墓36基が発見されている。当調査区に最も近い調査区であるC遺跡3次調査ではピット群が、南側にある第1次調査では弥生期の溝が1条あるが、多くは中近世の遺構群である。当地区周辺では初めてとも言える弥生時代遺跡の調査である。

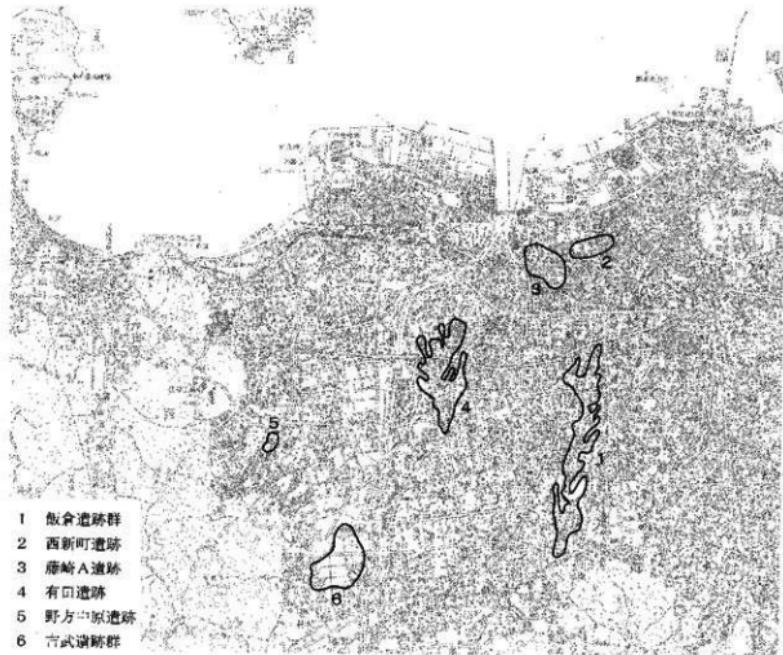


図1 早良平野の主要弥生時代遺跡

飯倉遺跡群報告書一覧

A遺跡

1次調査「飯倉A遺跡」1992

B遺跡 調査例なし

C遺跡

1次調査「飯倉C遺跡」1991

2次調査「飯倉唐木遺跡」1994

3次調査「飯倉C遺跡2」1993

4次調査「年報 Vol.13」2000

D遺跡

1次調査「飯倉D遺跡」1995

E遺跡

1次調査 未報告

F遺跡

1～3次調査「飯倉F遺跡」1994

G遺跡

1～3次調査「七張遺跡」1993

4・5次調査 2002年3月発行予定

H遺跡

1次調査「梅林古墳」1991



図2 調査地点位置図(1/8000, 1/400)

2 調査に至る経緯と調査の経過

(1) 調査に至る経緯と調査組織

平成11年7月14日付けで、株式会社東南不動産から城南区七隈2丁目835の35他における埋蔵文化財事前審査書が提出された。試掘の結果、当該地には遺構が残存するため、発掘調査することで合意し、委託契約を交わした上で、翌年3月22日から4月14日まで、年度を越えて調査を実施した。調査組織は次のとおりである。

調査	平成11・12年度	整理・報告	平成13年度
調査委託	株式会社東南不動産	代表取締役	澤田勝利
調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課調査1係		
課長	山崎純男	係長	山口謙治
調査庶務	同部	担当	米倉秀紀
		文化財整備課管理係	

(2) 調査の経過と概要

調査はバックフォーによる表土剥ぎから始めた。現況は樹木が茂る山林状で、西側が高いため、西側から表土を剥いだ。樹木は伐採していたものの、根株が隨所に残り、大きな根株を取り扱うと周囲の地山にも大きな影響を与えるため、その部分についてはバックフォーでの撤去をあきらめざるを得なかつた。廃土の一部は調査区外に仮置きできたが、それだけではまかねなかつたため、調査区を2分割し、打って返しをした。

地山は西半は橙色粘質土で、ロームと思われる。東半は花崗岩岩盤もしくは岩盤風化土、あるいは八女粘土の二次堆積層である。表土は10cm内外でそのすぐ下が地山面であるが、部分的に数十cmの客土がある。SD01北半部分には表土中から多くの土器片が出土した。全体の遺構の残りの悪さも考えると、早い時期に全体を削平され、削平された後の地表面が腐葉土化して現在の表土になったと考えることができる。検出した遺構は堅穴住居址、溝、土坑などである。調査区を反転した後、調査区外の東側と北側にトレーナーを入れ、遺構が存在しないことを確認して調査を終了した。

3 調査の記録

(1) 遺構・遺物の概要

検出した遺構は弥生時代後期の堅穴住居4軒、溝2条、土坑1基、時期不明の溝2条、土坑7基とピットである。遺構の残りは極めて悪く、堅穴住居は床面がわずかに確認できたSC07を除くと壁構のみの確認である。多くの土器が出たSD01も深さ5~15cmしかなかつた。出土した土器の99%は弥生時代後期の土器で、その他に須恵器・土師器の細片がわずかに認められただけである。総量で小コンテナ8箱が出土したが、その大半はSD01からの出土である。

(2) 堅穴住居

SC05(図4)

調査区南壁中央近くで検出した。壁構のみの検出で、南側調査区外へ伸びる。SC06と重なり、溝の切り合いでSC06に切られている。南東の調査区張り出し部の西壁際で検出した溝に続くものと思われ、復元すると南北方向の長さ約5.75mを測る。床面もほとんど遺存していないと考えられ、全体が東に向かって傾斜している。主柱穴は明確ではないが、調査区南壁にかかっているピットだとす



図3 遺構配置図(1/100)

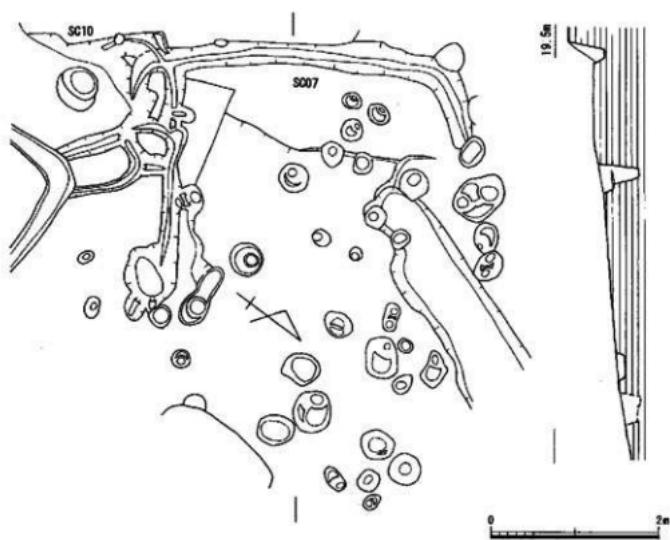
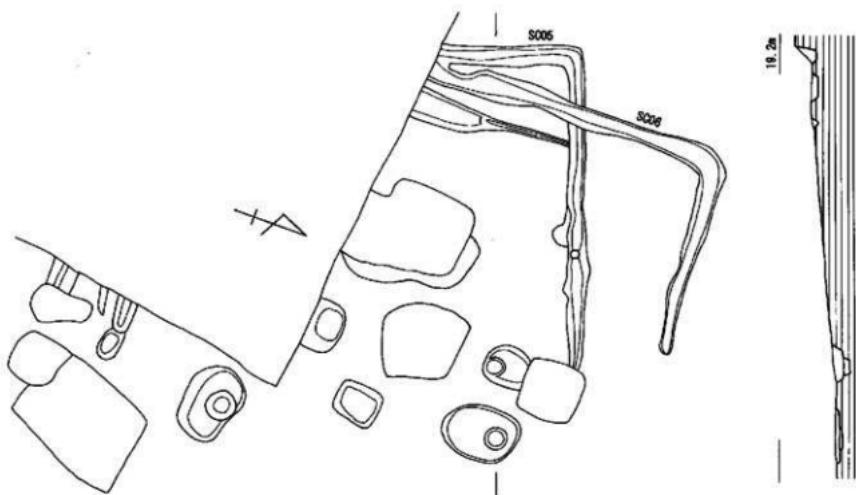


図4 堅穴住居(1/60)

ると、2本柱と思われる。遺物は壁溝から弥生土器の細片が小ビニール1袋出土した。

SC 06 (図4)

SC 05と重なって検出した。壁溝のみの検出で、調査区外に続く。南東の調査区張り出し部の西壁際で検出した溝に続くものと思われるが、住居の大きさ等を考慮すれば、北側の溝と考えられ、復元すると南北方向の長さ約6.3mを測る。溝に囲まれた中は全体が東に向かって傾斜しており、床面もほとんど遺存しない。主柱穴は2本か。遺物は壁溝から弥生土器細片が小ビニール1袋出土した。

出土遺物 (図5-1)

1は弥生土器で塗か。やや外反する口縁部片で、器壁が1.6cmと厚い。外面に赤色顔料の痕跡が認められる。調整は両面ともナデである。

SC 07 (図4)

調査区中央付近に位置する。SD 01と重なっており、SC 07が埋まった。もしくは埋めた後にSD 01が掘られている。西側壁及び床面と壁溝の一部のみが残存している。西側壁の長さ約4m、壁の残存高約30cmを測る。主柱穴は明確ではないが、図の断面図に掲載したピットが主柱穴ならば、住居は 4×5.5 mの長方形のプランを呈することになる。遺物は床面及び覆土、壁溝から弥生土器片1箱弱が出土したが、覆土の遺物の一部はSD 01の可能性もある。

出土遺物 (図5、2~7)

すべて弥生土器である。2は壺で、屈折の弱いく字状口縁である。胴部内面にハケメを施し、他はナデ調整で仕上げる。復元口径19.8cmを測る。3は壺の胴下半部と思われ、刻目突帯を施している。4は高壺筒部片。両面ナデ調整で仕上げる。5は器台で頸部復元径7.2cmを測る。外面には斜め方向の

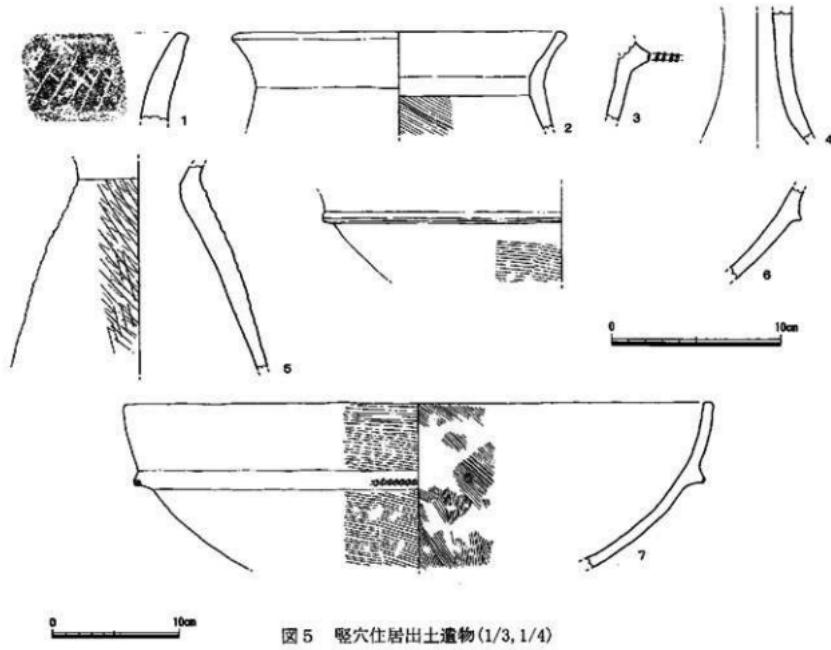


図5 壇穴住居出土遺物(1/3, 1/4)
1:SC 06 2~7:SC 07

タタキの後ハケメを施す。内面はナデ調整である。6は大型の鉢と思われ、三角突帯部の直径28.3cmを測る。突帯から下に横方向のハケメを施す。7も大型の鉢で、復元口径46.7cmを測る。口縁直下に刻目突帯を施す。両面ともハケメを施す。

SC10 (図4)

SC07の南側で重なって検出した。壁溝状の細い溝がし字形に曲がっており、かつ西側の一部には床面状の平坦面があることから、住居とした。ごく一部の検出なので、規模は不明で、主柱穴も不明である。出土遺物は弥生土器の細片が数点のみである。

(8) 溝

溝状を呈する遺構のうち、遺物が出土したものに番号を付けた。

SD01 (図6)

調査区中央やや西側を南南西から北北東に向けて走る溝で、SC07埋没後に掘削している。南側で別の溝とダブってややわからなくなっている。現状は途中で切れており、北側をSD01-1、南側をSD01-2とした。溝底までの深さは5~15cmで、溝幅は30~90cmを測る。SC07の残存状況から考えてかなりの削平を受けているが、それでも本来の深さは1mにだいぶ足りないと考えられ、さほど大きな溝ではない。溝底は南から北に向かって傾斜しており、そのまま北側の谷につながると考えられ、雨水の流路のような機能をもつものか。表土掘削中から多くの上器片が出土し、溝の残りが悪い割には略完形品を含むコンテナ5箱の遺物が出土した。ほとんど弥生土器であるが、須恵器片が1点、布留式と考えられる土師器片が2点出土した。

出土遺物 (図7~8・20・22・23)

図示したものは1点を除きすべて弥生時代遺物で、上器の胎土は2~3mm大の石英粒・白色粒を多く含み、金雲母粒を含むものもある。8は甕の頸部片で、頸部径15.6cmを測る。内面は2ヶ所の稜を有する。ほぼ全面ナデ調整である。11は甕の口縁部片。ゆるやかに外反する口縁部で、外面にハケメを施す。22は甕の口縁部で、復元口径39.3cmを測る。調整は、外面の口縁部がナデ、胴部がタテハ

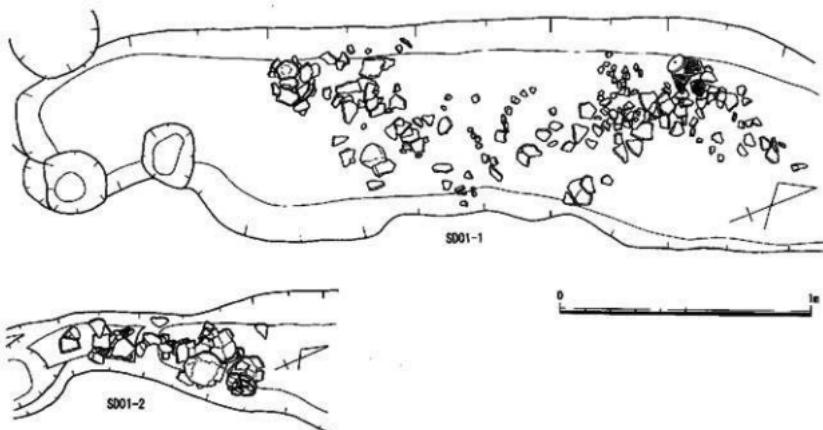


図6 SD01遺物出土状況(1/20)

ケ、内面は口縁部がヨコハケの後ナデ、剥部がナナメハケである。10・13は壺の口縁部片と思われる。10は先端部が上方向に大きく飛び出している。口唇部から下にはハケメを丁寧に施している。13は外面上にヘラ状工具による縱方向のナデを施している。9は細片のため難しいが、布留式ではないかと思われる。他の遺構も含めて、弥生土器の甕の多くは黄橙色もしくは褐色系の色調のものが多いが、9は黄色に近い。12は鉢で、短い外反口縁がつくものと考えられる。復元頸部径17.4cmを測る。14は壺の突帯を有する胴部片。刻目を有する。15は底部片で丸底に近い。底に煤が付着している。16は高壺の壺部小片でていねいなナデ調整を施している。17は鉢の口縁部。復元口径24cmを測る。外面上は最後にナデているためやや不明瞭だが、幅の広いハケメもしくは丁寧なヘラ状工具によるナデか。内面は斜めの細かいハケメの後、部分的に指でなでている。微細金雲母粒を含む。19は器台。内面は指押さえ、外面上はナデ仕上げである。20は凸形支脚である。完形に近いが、底部の一部を欠失する。器高14.75cm、底径14.4cmを測る。上面中央に径5mmの穴を穿っている。外面上には幅4～5mmの目の粗い

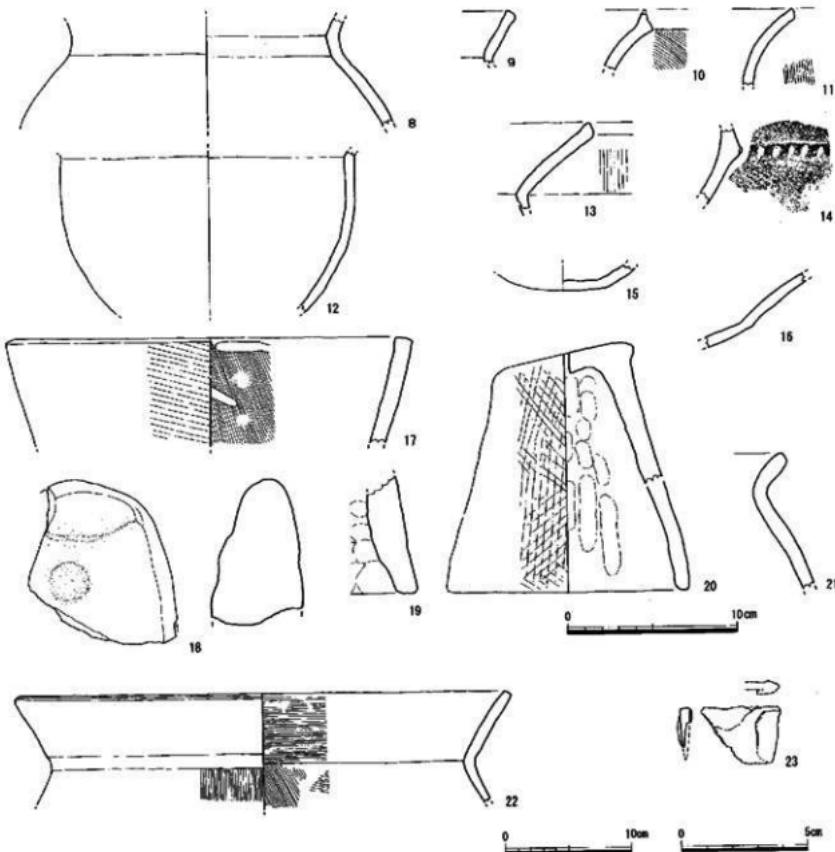


図7 溝出土遺物(1/2, 1/3, 1/4)
8~20・22・23: S D01 23: S D03

ハケメを施し、内面はほぼ全面指押さえである。18は痛みを有する砂岩質の磨石で、ほぼ全面が磨かれ、両面と内側縁間に稜が走る。23は鉄製穂摘具。幅2.2cm、厚さ3mmを測る。

SD02

調査区中央やや東側で検出した。SD01とは方向が異り、南南東から北北西に向かっている。ほぼ全体同じ幅で走り、幅約50cm、深さ約30cmを測る。弥生土器の細片が小ビニール1袋出土した。

SD03

調査区東側で検出した。全体がやや曲がっている。東西方向に走り全長約4.25m、幅約30cm、深さ約10cmを測る。弥生土器細片が少量出土した。新しい時期の溝ではないかと思われる。

出土遺物（図7-21）

1点のみ図示した。21は弥生土器の甕で、口唇部は丸みを帯び、他の甕とは異なる。全面ナデで仕上げる。口縁部先端と破片の下部に煤が付着している。

SD16

調査区東端で検出した南北方向の溝。南端は根による擾乱があり、北端も新しい時期のピットで切られている。幅20~35cm、深さ5~10cmと浅い。弥生土器が10片ほど出土した。

（4）土坑

SK04（図8）

調査区南壁際で検出した。結果的には、2~3基の土坑の切り合いと思われる。上層断面図を見ると、上・中層と下層の2つに大きく分かれ、下層の西側は壁を抉っている。ただし、覆土の状況は中層と下層には大きな差ではなく、一連の目的による土坑の掘り直しの可能性もある。覆土上層には炭化物層があり、中層から下層には白色~桃色粘土、いわゆる八女粘土が多く含まれている。ただし焼土ではなく、壁面も焼けていない。上部に炭化物が堆積する状況は焼土坑に似ている。遺物は弥生土器の細片ばかりが100片ほど出土した。

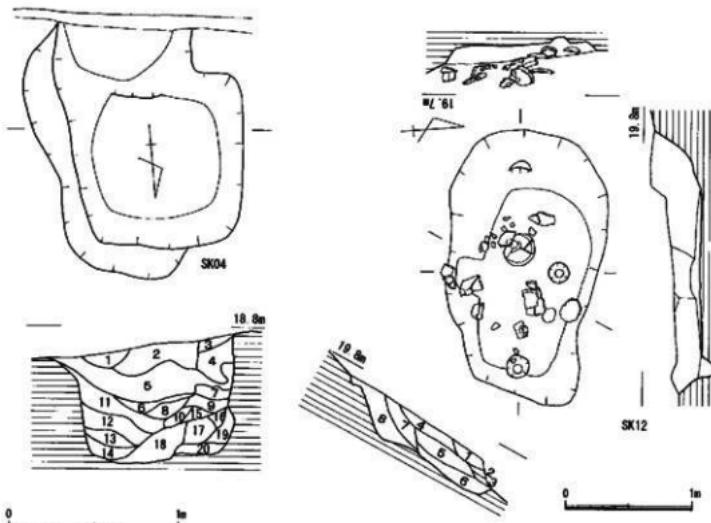
SK12（図8）

調査区西端近くで検出した。覆土最上部がローム層のため、遺構検出時は発見することができず、調査途中で確認した。平面形は長方形に近い不定形で、最大長2.15m、最大幅1.26m、最大深40cmを測る。南側下端中央付近を方形に抉り込んでいる。検出当初は全形を小さく考えていたため、土層断面の場所が不適切であるが、概ね南側の高い方から土が流入した自然堆積層である。埋土と遺物の関係は完全には把握していないが、南側の遺物は高く、北側は低い。概ね7~8層の埋没後に遺物が投棄または流入したと考えられる。土層断面の北側と南側で大きな差があることと、床面にも差があることを考えれば、2基の土坑の切り合いと考えた方が自然かもしれない。ただし覆土には極端な差はない。遺物は完形に近い高杯1の他、甕・壺の破片、石礫1点などコンテナ1箱ほどが出土した。

出土遺物（図9-24~34・38・39）

土器はすべて弥生土器である。ほぼすべての土器が2~3mm大の石英粒・白色粒を多く含み、金雲母粒を含んでいるものが若干ある。24・25は口縁部断面がく字状を呈する甕で、24は復元口径19.6cmを測る。外面にハケメを施し、内面はナデで仕上げる。25は内面にハケメを施し、外表面は摩滅のため不明であるが、ナデ仕上げのようである。復元口径22.2cmを測る。26は甕の底部で、復元底径6.7cmを測る。両面ともナデ調整である。29も甕の底部と思われ、復元底径7.2cmを測る。内面はナデ調整で、外表面は摩滅している。27・28は壺の胴部突唇片で、ともに断面台形の突唇頂部に斜めの刻目を施している。30・31は壺の底部と思われ、底の外周と胴部立ち上がりの稜線がシャープではない。30は底径8cmを測る。両面にヘラ状工具のケズリ状痕跡が認められる。最後はナデ仕上げである。金雲母粒を

含んでいる。31は復元底径7~7.5cm前後を測る。内底部の厚みが1.5cmと厚い。両面ともナデ仕上げのようである。32は台付鉢か。外面・内面ともにナデ調整で、外底部は指押さえである。33・34は高壺。33は頸部径5.2cmを測る。筒部内面にしぶり痕がある以外は全面ナデ仕上げである。34は脚部の一部を欠する以外はほぼ完存している。口径24.5cm、器高17.5cm、復元脚部径15.3cmを測る。壺部はやや深く、壺部と筒部の境は明瞭ではない。筒部内面にしぶり痕がある以外はほぼ全面丁寧なナデ調整を施している。38は石鑿である。漆黒黒曜石製で片脚を欠失する。長さ2.50cm、幅1.79cm、厚さ0.39cmを測る。縦長の剥片の周縁部を調整している。土坑内のピットから出土した。39は漆黒黒曜石。2回以上の調整を施しており、小型のスクレイパーと思われる。長さ2.42cm、幅1.28cm、厚さ0.25cmを測る。



SK04土層名称

- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1 白色粘土+橙色粘土+黄色土 | 11 橙色砂質土を含む白色粘土 |
| 2 1より橙色粘土多い | 12 10に同じ |
| 3 橙色砂質土 | 13 黄褐色土を含む白色粘土 |
| 4 橙色砂質土まじり粘質土 | 14 橙色土+白色粘土を含む黄褐色土 |
| 5 白色粘土+橙色粘土を含む黄褐色粘質土(炭多い) | 15 白色粘土 |
| 6 橙色粘質土 | 16 橙色砂質土を含む白色粘土 |
| 7 棕褐色土を含む炭化物層 | 17 白色粘土を含む褐色砂質土 |
| 8 橙色粘質土を含む白色粘土 | 18 黄褐色土+白色粘土+橙色砂質土 |
| 9 白色粘土+橙色粘質土を含む黄褐色粘質土 | 19 白色粘土+橙色砂質土 |
| 10 9より白色粘土多い | 20 19に黄色粘土含む |

SK12土層名称

- | |
|----------------------------|
| 1 明赤褐色微細繊維まじり粘質土に炭化物含む |
| 2 1に明黄褐色砂質土含む |
| 3 1に明黄褐色粘質土含む |
| 4 明赤褐色微細繊維まじり粘質土 |
| 5 4にわずかに明黄褐色粘質土含む(土器片多い) |
| 6 5に炭化物含む(土器片多い) |
| 7 4に炭化物・明黄褐色土含む |
| 8 明黄褐色粘質土に明赤褐色土少量含む(土器片多い) |

図8 SK04・12(1/30, 1/40)

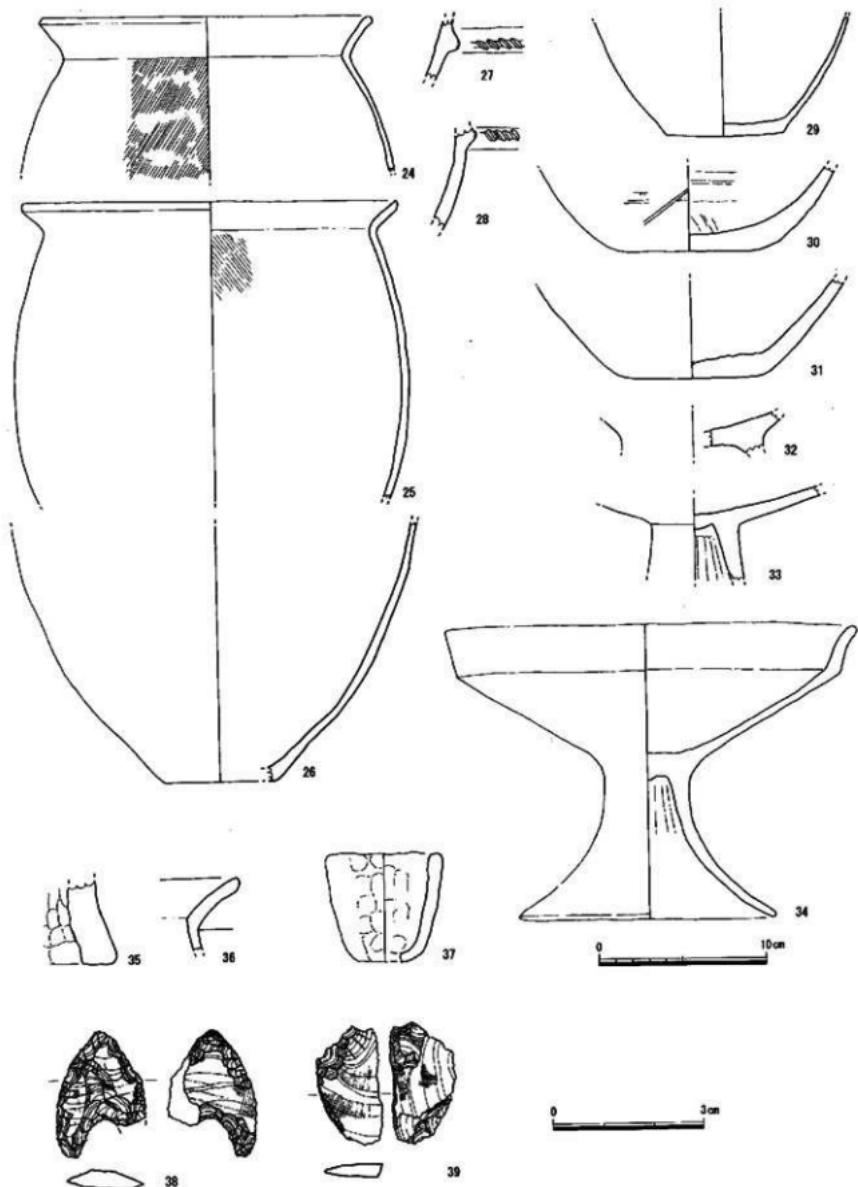


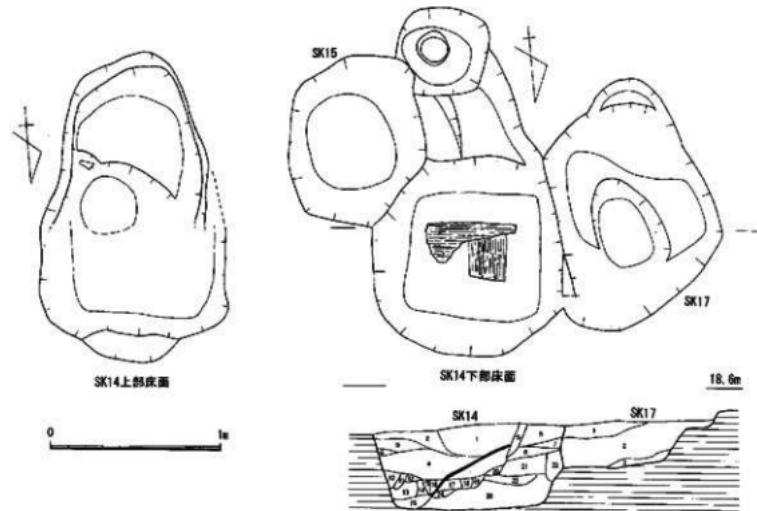
図9 土坑出土遺物(1/1, 1/3)
24~34・38・39: SK12 35: SK14 36: SK20

SK13

調査区北側で検出した。約1.1mの方形の穴で、SD02を切っている。深さ75cmと深い。弥生土器が少量出土した。埋土は軟質で、出土遺物が少ないとからも現代の穴と思われる。

SK14 (図10)

当初、SK15とひとつの土坑と思っていたため、切り合いの状況がわからない。SK15に切られていると考えたが、証拠はない。上坑中央の東西方向にベルトを残し、北半から掘ったが、北側と南側で埋土が大きく異なっていたため、結果的には大きな土坑の一部を埋めて、再度土坑を作ったと考えられるが、北半掘削後に気づいたため、ベルトから北側は上の土坑をとばしてしまった。ベルトから南側 (SK14-A) には中・上部に厚い焼土があった。焼土の中には白色粘土が焼けたと考えられる径5~10cm大の塊が約30あった。むしろ焼土より塊の方が多い。この塊の中には一方が黒変している



SK14土層名

- 1 橙色小礫まじり砂質土に明赤褐色粘土含む
- 2 明黄褐色土(炭化物含む)
- 3 黄褐色土
- 4 黄褐色土に明赤褐色粘土含む(炭化物含む)
- 5 橙色焼土
- 6 白色～橙色粘土
- 7 明黄褐色粘土質土
- 8 白色～橙色粘土
- 9 橙色焼土
- 10 黄褐色土に橙色粘土少量含む
- 11 10に白色粘土含む
- 12 白色粘土

SK14土層名

- 13 10に白色粘土含む
- 14 橙色粘土に黄褐色土・白色粘土を含む
- 15 明赤褐色焼土
- 16 橙色砂質土
- 17 明黄褐色土に焼土粒含む(樹根?)
- 18 明黄褐色焼土塊
- 19 17とはほぼ同じ
- 20 明赤褐色焼土
- 21 白色粘土+橙色粘土+明黄褐色土
- 22 明黄褐色土に焼土粒含む(樹根?)
- 23 22に橙色粘土粒含む

SK17土層名

- 24 明黄褐色土(炭化物含む)
- 25 24に同じ
- 26 白色粘土大粒ブロック+橙色粘土小粒ブロック+明黄褐色粘土

SK17土層名

- 1 明黄褐色土に橙色粘土ブロック含む
- 2 白色粘土ブロック+橙色粘土ブロックに明黄褐色土含む
- 3 明黄褐色土に橙色粘土粒・白色粘土粒含む

図10 SK14・15・17(1/30)

ものもあり、炉壁ではないかと考えられる。またこの穴は床面・壁面のほぼ全面が焼けている。段から北側（SK14-B）はAより25~45cmほど深い。図の土層断面はBの南端付近である。全体的に西側から流れてきた土で埋まっており、中程に炭と焼土の層が観察され、白色粘土の層もある。穴のほぼ中央、そこから20cmの高さに大きな木炭が2つあった。木炭はほぼ木の原形を保っている。1つは長さ30cm、径20cmの丸太状で、もう一つは長さ40cm、径20cmで前者の炭の上に直交して斜めにあつた。SK14-Aは、現存長約50cm、現存幅60cm、深さ20cm前後を測る。SK14-Bはほぼ円形を呈し、径約120cm、深さ50cm前後を測る。両方合わせた全長は2m近い。土層の状況や掘削時の所見から、まず14-Bを掘った後、穴の南側下部約20cmを埋めて14-Aを築いたと考えられる。Aの床面・壁面は焼けている。土坑の放棄後は、南側に炉壁や焼土塊がたまり、北側には炭がたまつたと想定できる。遺物は花崗岩2石と土器約100片で、土師器・須恵器は確認できず、時期がわかるものはすべて弥生時代後期の土器である。

出土遺物（図9-35）

35は弥生土器の器台の底部片である。外面はナデで、内面は指押さえである。

SK15（図10）

前述のとおりSK14掘削中に検出した。SK14との切り合いはわからない。略円形で径約1m、深さ45cmを測る。西側には段がつく。遺物は出土していない。

SK17（図10）

SK14-Bに切られる。全形は菱形に近く、南の菱形頂部に小さな段がつき、床面中央も深さ30cmのピット状になっている。全体の長さ約1.5m、現存の幅約1m、床面の深さ50cm前後を測る。深さは上層断面作図後にさらに深くなっている。土層中にはわずかながら白色粘土が入っているが、焼土や炭はない。遺物は土器の細片約10片が山上した。

SK19

調査区東側で検出した。SD03に切られる。長さ約1.4m、幅1.2m、深さ60cmを測る。埋土は軟質で、新しい時期の穴と思われる。出土遺物はほとんどない。

SK20

調査区北端で検出した。当初住居ではないかと考えたが、覆土が新しい土で、床面も北へ傾斜している。土器片100片ほどが出土したが、いずれも細片である。

出土遺物（図9-36・37）

36は壺の口縁部片。口縁部は両面ともナデ、胴部外表面は摩滅のため不明。37は小型の手握ねの鉢。両面とも指押さえで整形している。口径7cm、器高6.4~6.6cmを測る。

（5） ピット

50を越えるピットを検出したが、このうち半分近くは樹根等によるもので、弥生期のピットはさほど多くない。このうち、SC05・06の東側にあるピット104・149では、床面に完形の上器が置かれていた。両ピットはしっかりした穴で、堅穴住居の主柱穴の可能性も考えられる。

出土遺物（図11-40~42）

40はピット104出土の鉢で、完形品である。摩滅が著しいが、全面ナデ調整と思われる。口径12.6cm、器高6.2cmを測る。底面は丸底に近い。41・42はピット149の出土の鉢。41は完形品で、口径8.9cm、器高7.1cmを測る。全体的に器壁が厚い。両面とも指押さえの後にナデで仕上げる。42は口縁部の1/3を欠失する。口径14.5cm、器高7cmを測る。裏面に赤色顔料を塗布している。外面は摩滅しているが、両面ともナデ調整と考えられる。

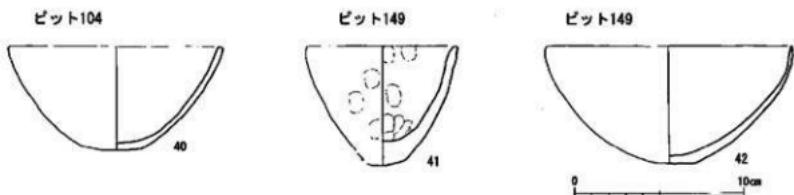


図11 ピット104・149出土遺物(1/3)

4まとめ

調査地点は西から東に傾斜し、北側に深い谷と接する台地端で、集落の端と考えられる。調査区東端では台地端でよく検出される不定形のよくわからない土坑やピット・溝などが検出され、当地点から東にはほとんど遺構がないものと考えられる。また調査区内は全体が大きく削平されて遺構の残りは悪く、個々の遺構の特徴は導き出しにくい。それでも弥生時代後期中頃という、比較的早良平野では検出例の多くない時期の住居址の検出、多くの土器群などの成果がある。

該期の早良平野の集落のうち代表的な遺跡は国指定史跡の野方遺跡である。同遺跡は環濠内に多くの住居群があるが、環濠の一つであるA溝からは当遺跡と同様な土器が出土している。飯倉遺跡群の場合には丘陵中央部が削平のためほとんど遺構が残っていないため、全掘しても全容は不明のままと考えられるが、鏡の鋳型や銅劍が出土しており、重要遺跡であることは疑いない。

調査では、住居以外には溝と土坑があった。SD01・02は方向性に統一性がなく、また残りは悪いものの、しっかりした溝である。SC07の壁が30cmほど遺存していたことを考えれば、溝の深さは最大でも1m以下であることと、ともに谷に向かってやや蛇行しながら走っていることから、雨水の流路(排水)等の用途が考えられる。それでも完形に近い支脚や器台の大きな破片などの多くの遺物が入っている。山上状況からは祭祀的な状況は考えがたく、時期的にまとまっていることからも、集落の移動等に伴う廢棄と考えられる。

土坑のうち、SK14はやや特殊な土坑である。検山時の状況や掘削途中の状況からは、穴を掘った後、床近くを十数cm埋めた後、南側に炉を作ったと考えられる。南側の炉は壁面・床面が焼け、床近くには焼土と炉壁状の焼けた粘土塊が堆積している。一方炉の北側は丸太状のものも含めて炭の層が確認できる。時期的には弥生土器が出土しているだけで、弥生時代であるという確証がない。本文中にあるとおり、当初はいわゆる焼土坑として掘っていたが、実際は焼土坑とは異なっていた。通常の焼上坑は床面が焼けておらず、壁の特に上面が還元されているのにに対し、当土坑はほぼ全面が焼けていることと、炉壁と考えられるものが存在し、何より一度掘った土坑の床面近くを埋めているからである。仮に弥生時代の上坑とすると、床面の乾燥化を計っていることから、青銅器の製作に関する炉の可能性がある。飯倉遺跡群からは銅鏡の鋳型が山上しており、その可能性も考えたが、銅滓や坩堝、銅片などは山上しておらず、時期も含めて結局不明のままである。炭窯であろうか。

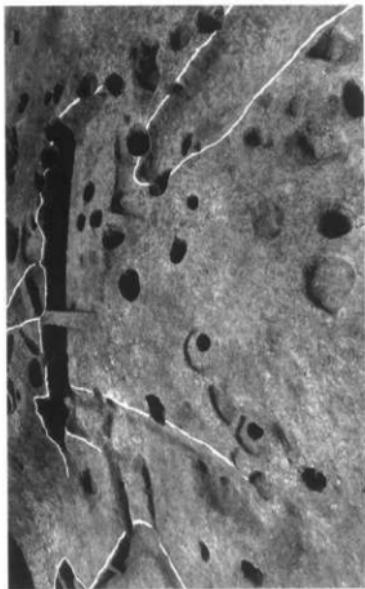
一方SK04でも炭化物や焼土塊が出土した。いくつかの土坑が切り合っていることもSK14と同じである。ただし、床面や壁面は焼けておらず、炭や焼土塊の量も少ない。両土坑とも調査当初は焼土坑という認識で掘ったため、結局わからずじまいであった。自成したい。



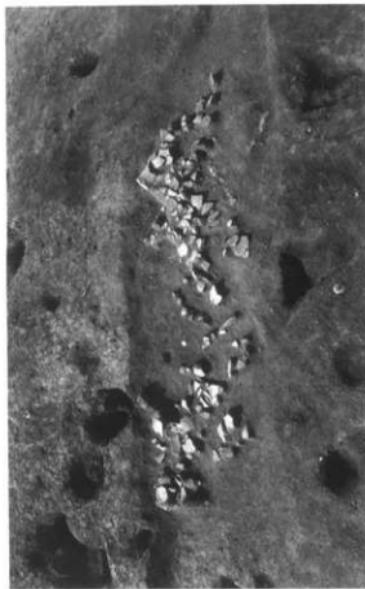
調査区西半全景



調査区東半全景



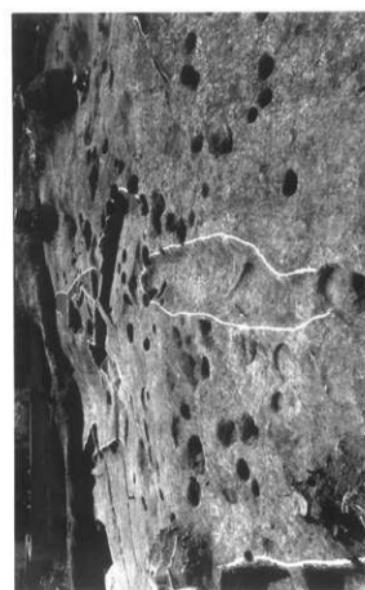
SC 07・10 (東方6号)



SD 01 遺物出土状況



SC 05・06 (東方5号)



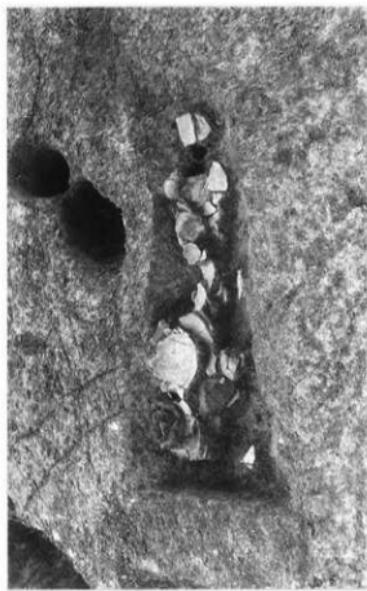
SD 01 (北方5号)



SK1 2 土層断面



SK1 2 全景 (西から)



SD0 1 遺物出土状況



SK1 2 遺物出土状況



SK04 (北Z・E)



SK14・15・17 (北Z・E)



SK04 土層



SK14 土層



SK 19



PIT 149

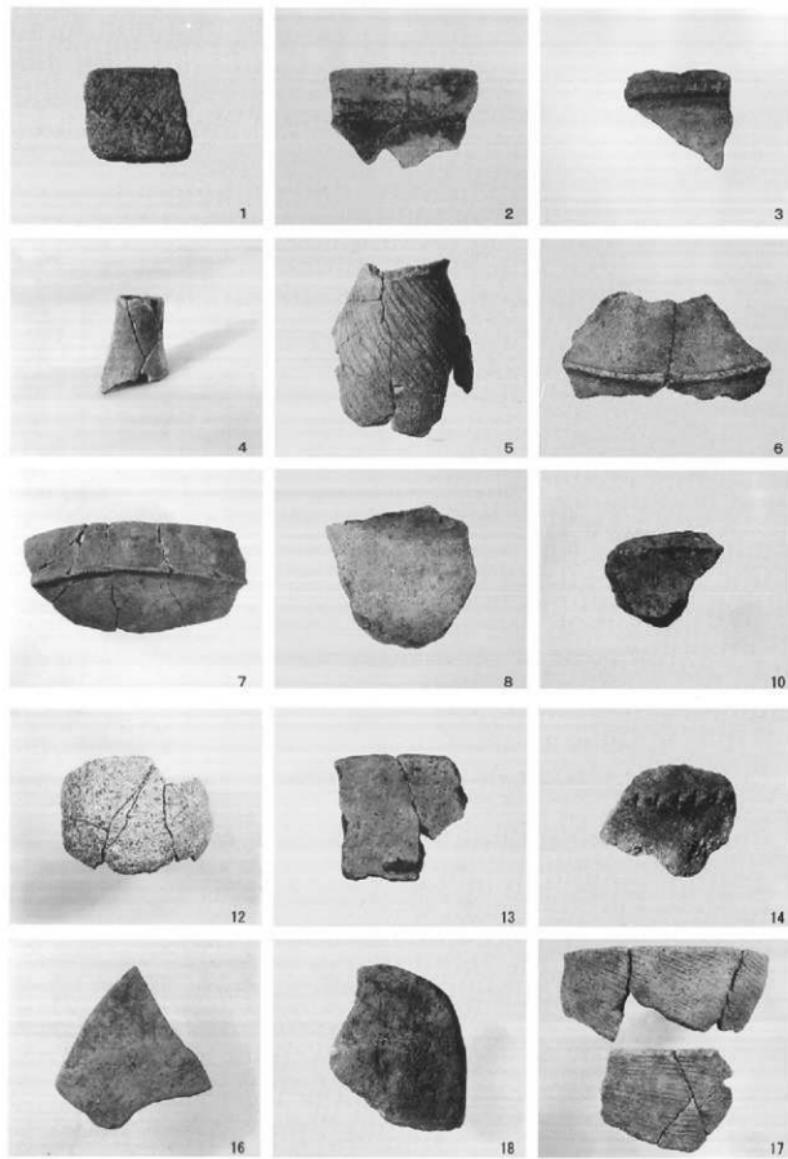


SK 14 · 15 · 17

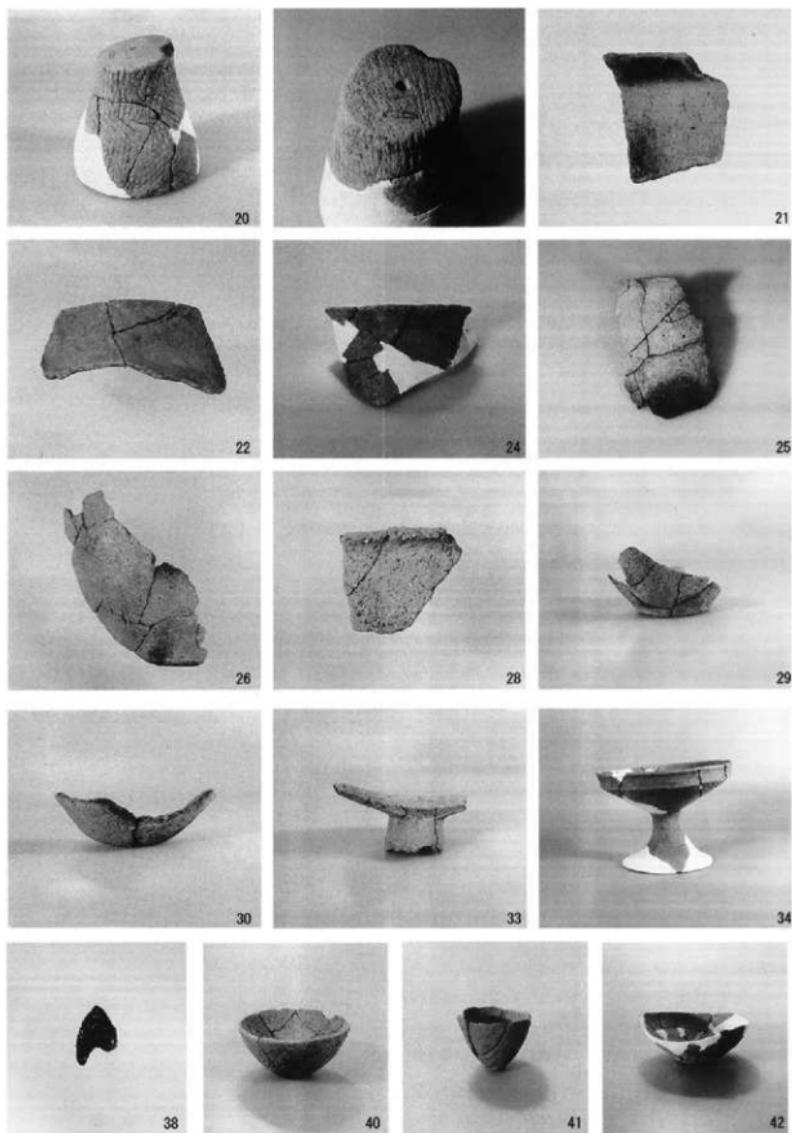


PIT 104

圖版 6



出土遺物 1



出土遺物 2

飯倉C遺跡3

福岡市埋蔵文化財調査報告書第696集

2001年12月27日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1
印刷 有限会社 あさひ印刷所